

# 第一〇章 伝承

## 第一節 歴史散歩

### ◆房総往還道（ボウソウオウカンドウ）

江戸時代中期までは江戸から東京湾に沿って安房の北条まで行く道としては房総往還道が唯一の公用通行道路でした。現在この道はほとんどが旧道と残っているが、その一部が現在坂田に残されている。

畑沢から山越しに坂田に通じ、坂田と高坂の間に出る道で、その出口部分には旅の安全を願って今でも道祖神が祀られている。

### ◆大名と旗本

江戸時代の村々は大名や旗本といった幕藩領主による支配を受けました。拝領高一万石以上を大名、それ以下を旗本、御家人といい、旗本と御家人の違いは、主に將軍にお目見えできるかそうでないかで区別した。

また、大名の支配する村々は「領地」と呼ばれ、旗本の支配する村々は「知行地」とよばれた。近世期の坂田は、

旗本小笠原氏の知行地のひとつだった。

### ◆旗本小笠原氏

徳川家康が江戸に入ると小笠原氏は上総国周准郡のうちにおいて二五〇〇石を充てがわれている。この中には坂田のほか市内の人見・中野や富津市の富津・新井・西川・本郷などの村々があった。ところで、小笠原氏はもともと三河国幡豆（ハズ）郡寺部城を本拠としたが、この地に配されることになった理由は、江戸を守衛する軍事上の目的があったようだ。対岸の相模国三浦郡には御船奉行の旗本向井將監が配されている。小笠原氏は、家康から船手役を命ぜられ、三浦の対岸の房総に配されました。

船手役というのは、徳川水軍の従事者である。初代信元、二代信盛とこの船手役を勤め、三代長住の時には船手頭（水軍の長）に任命されている。湾の喉元にあたる江戸を守る上から三浦と富津の両岸を水軍の旗本で固めた。初代信元はその後采地富津に住み、当

地で亡くなった。法名を正珊といい、富津市西川の正珊寺に葬られている。正珊寺はかつて信元が開基した寺で、その後、小笠原氏代々の墓地となった。

### ◆小笠原陣屋

江戸時代、旗本領主のほとんどは江戸に集住し、知行地に陣屋や名主を置いて支配した。旗本小笠原氏の陣屋は、はじめ富津（その場所を殿町という）に置かれた後、文化八年（一八一）に知行地の富津が松平越中守（白河藩主松平定信）の領地となったため、陣屋は人見（現周西幼稚園前）に移された。この陣屋には、大草、大嵩といった家臣が配され、村々と江戸の領主屋敷との政治・行政的仲介事務を行っていた。ここには、坂田村などから度々庭掃除や屋根の補修などに出かけたことが史料に記録されている。

この陣屋は明治維新後取り壊されるまで存続した。

（「坂田自治会報」色部昭男）

◆区有文書について（大和田）

大和田には代々引き継がれている茶箱三箱分の区有文書がある。資料には一次資料と二次資料があり、これは地域の歴史を知る上で非常に大切な一級資料といえる。一次資料はその当時の人たちにより時代の中で作った資料なので一番信憑性があり、二次資料は執筆された文献などに基づいて作った資料でまとめる人、書いた人の恣意で事実と違うこともある。一次資料ではそういうことがないので信憑性がある。

江戸時代、地方の村々にある文書（地方文書）には、「区有文書」と「名主文書」の二種類ある。

「区有文書」はどこにでもあるかという点を決してそうではない。大和田の場合はそれなりの理由があり先祖代々伝えられてきたようです。「大和田区」は戦後なくなりましたが「大和田区」に引き継がれ「区」から「自治会」に引き継がれ自治会管理で残されてきた。「名主文書」は、人見の

守八郎家に伝わる文書、坂田には昭和の初めに家がなくなりましたが大牧家（代々名主の大牧新左衛門が生まれた）の文書、中野には綾部家文書などがある。何故違いが出てくるのかは諸説あるが、我々が市内の代々名主文書、区有文書を調べた経緯の中では、区有文書が伝えられてきたのには理由がある。人見や中野では近世から幕末まで名主の家が代わっていないので文書はその家に残ってきた。大和田では村が小さかったこともあり、名主の家が代わっているのではない。江戸時代には連判名主制度があり名主を務めるには相当の経済力がないと務まらなかった。近世の年貢は個人個人に賦課されるのではなく、村請制といって「村」にどんとくるので村で皆済しなければならぬ。村で年貢を納められない人がいると、経済力のある村役人惣代を務めた名主、組頭、百姓代が地方払い（肩代わりする）で年貢を

全納する制度で、領主側には取りはぐれがない便利な制度だった。

寛政六年は名主次郎兵衛、明和三年は五郎左衛門、嘉永七年小左衛門、この人は五大力船を持っていた家で久保村の年貢米を江戸に回送していた。村方三役（名主・組頭・百姓代）でまわし村を運営していた。

江戸時代、小糸川の流域には旗本領が多く、領主は一つの村で一人ではなかった。一つの村に領主が二人から三人（相給という）、多いところでは九人いるところもあり、大和田には一時幕領になった人もいる。

大和田では名主が代わった（動いた）ことで、区有文書が大事にされて引き継がれてきたのではない。それは、村を運営するのに証拠書類になる大切な文書だからである。

（平成二四年度

大和田自治会古文書内容報告会

講師 色部昭男

## 第二節 口伝

### ❖ 妙見様の昔の祭り（人見）

昔より、妙見祭は毎年七月二二日に施行した。徳川時代、浅草に本陣を持つ小笠原の殿様安芸信元は、上総の国周准の二五〇〇石を賜り、富津に在住を許され、富津・西川・人見・大和田・坂田・中野・久保・中富・本郷・日渡根の十ヶ村を持つ旗本であった。この殿様が、祭礼の際は神馬に乗り、神社に巡回し、其の祭典を施行した。其の祭典には、大堀よりお神輿、大和田より剣、二間塚より錦の旗、青木より獅子が参加した。明治四年、廃藩置県により武家制度が廃止されたが、現在でも殿様が乗った馬は御召馬として行幸には参加している。其後お祭りは一七カ村世話人と、氏子総代の代表が、宮司と共に祭典を差配する事になった。

明治二十一年頃より、大堀のお神輿は、浜の弁天様前から担ぎ始め、新道を通り、当時人見橋が無いので小糸川を担

いで渡り、垢離取り場より上陸して、山下鳥居前に鎮座して休憩となり、是を、人見若連が交代して担ぎ、石段を登り、頂上に至り拝殿前に安置する。

式が終わると人見の若衆が頂上を担いで、時間になるとお神輿を頂上に納め人見の若衆は下山して大堀連に伝える。大堀の若連は石段をかけ登り、頂上のお神輿を担いで石段を下り、元の道は大堀に戻るのが昔の祭典であった。

### ❖ 浦祭り・水神祭（人見・坂田）

人見の浦祭りは、人見浦を清める海の祭りで毎年一月二二日だった。場所は人見神社表門下と厄神様前広場で、神官や御嶽山の行人による「湯立て」が執り行われた。

戦後は場所を漁業協同組合前の広場に移した。当日は海を休み、浜の関係者が大勢集まり、浦を清めながら海の安全と大漁を祈願した。これは古来たち子供のところから見ているので、明治の頃からの古い行事であろうという。しめ縄を張ったり湯釜の準備など漁

業関係世話人が中心となっていたが、漁業組合員も戦前の一七三名から、戦中、大和田との合併で二二〇名余りの大所帯となっていたので、当時この海の祭りは大変な賑わいだったという。



坂田浦・秋祭り 「神輿渡御」

しかなかった)。

坂田漁協のメンバーは明治三〇年の組合発足時七六名、太平洋戦争後分家の加入などもあって一〇八名、そして最終的には一二二名になっている。浦祭りは全員参加が原則だった。

一月一二日は船に餅と御神酒をあげ豊漁と海苔の豊作を祈った。坂田の浜の先には「海神」の鳥居が浜辺からおよそ五〇m先に神々しく立っていた。そこで海上安全、豊漁祈願の祝詞をささげ、神主が湯立ての神事を執り行った。この祭りには村中の男が総出で参加し、祭礼当日は海苔の収穫最盛期であるが、何人も海に入ることを許されない厳しい掟があり、見張りさえ出たという。祭りに参加できるのは男だけで、祭礼前日の鳥居の掃除、シメ縄を新たに飾りなおす事から、神事の後の宴会の料理、準備、後片付け一切、毎年交替制の当番に当たった一二人が執り行った。家庭では寿司などのご馳走を作ってくつろぎ嫁入り先を呼んで接

待したり嫁が里帰りして骨休みしたり、一日浜を休んだ。

大和田でも埋め立てで浦がなくなつた昭和四〇年頃まで浜で行われていた。船おろし(人見・坂田)

新造船が完成すると、船おろしを満潮時に行った。お神酒を飲んだあと親戚、友人など一〇人位が新造船に乗る。



坂田 「船おろし」

その船を水車のあるところ(今の白井石材店、沼田米穀店の間)へ漕いで行き、そこで三回廻してから激しく揺さ

ぶり、乗っている人を皆、海へ放り込んだ。この船の風浪に対する抵抗力をみるのと、漁師の水難の魔よけの意味で行ったものだ。その場所は水車から落下する水のために一番深いところだった。そのあと餅投げをして祝ったが、その時墨を誰かれかまわず顔に塗りあって大賑わいしたものだ。その墨も油の入ったナベズミで、洗ってもなかなか落ちず閉口したものだった。埋立前は毎年二、三隻の割合で行なわれた。

✦馬出し(坂田)

昔、祭りは一〇月一七日で、戦前から昭和三〇年頃までおこなっていた。昭和一〇年頃の祭礼は勇壮に華やかに繰り広げられていた。昭和一〇年は御社殿改修の年であったからこの年の祭りは格別盛大であった。

行事の取り仕切りは敬神掛りを終わった世話人が馬世話人の役職についた。神馬に選ばれた馬は、一週間海に出て水浴びし禊をしたものである。神社を出たお神輿は半九郎前の御旅所に安置

してこのあとで馬出しの行事が始まる。馬出しは、左右のたてがみを両方から掴んで一緒に駆けるが、慣れた人でないと上手に走れない。ところが、馬持ちではなかったのに馬さばきが上手でいつも走らせる名人もいた。



坂田 「馬出し」

そのほかに馬の尻を鞭で叩いて興奮させ、馬がビクビクして暴れるのを観客と一緒に囃したてる「アブ」がいた。神様の「みたま」を背にした神馬を

先頭に田代屋前から清九郎前まで二町ほどの道を二〇頭余りの馬が突走った。走り終えた馬は鼻面を沖の道に向けられ、まだ刈り取りがすっかり済んでいない立毛の残る中道をひと回りして再び出発点に戻り再度力走した。この頃は農耕馬が多く飼育されていたので奉納された馬は七、八〇頭だった。他村から奉納された馬は客馬と言われ、中野・貞元・飯野・大貫・小糸など方々から来た。また自分たちも客馬として出かけて行った。

平素農耕に従事している馬もこの日ばかりは着飾って一際立派だった。観覧席は道路より一段と高い甘藷畑や大豆畑で踏み荒らされ大分苦労されただろうが苦情を言うものはなかった。走り終えた馬は、この場所から寺家坂の馬場へ順次移っていった。寺家坂馬場は八幡神社社有地で約三反歩あったが、現在は学校群用地の一部になっている。この場所には、文化一〇年に植えられたという老松が二〇数本あり景致の場

所だった。坂田では今から数十年前、当時の青年部によって復活され、その最初の年にまだ工事中であった坂田中野陸橋の場所でこの馬出しが再現されました。その後、何年間か奉納行事と地域への練り歩きが行われましたが、現在は馬の確保の困難さなどの理由から休止のやむなきに至っていることは大変惜しまれるところです。

#### ❖川びたり（人見）

一二月一日は「カワビタリツイタチ」といい、水難よけと六月、一二月朔日の大祓いの禊の意味があるという。一二月一日にお供え餅を作って橋に供えたと言われている。また、米の粉でダングを作って神棚と仏壇に供えた。この地域では小糸川を利用して沖漁、又は海苔とりをしていたので、水難の安全を願う気持ちで特に強かったようである。昔は餅をついて汁粉餅を作り、鼻に汁粉をつけて川へ行って尻を浸してくる行事だった。

#### ❖大和田の火災と爆発事故



手で突っつき合う遊びをした記憶がある。お爺さんに勝ったこともあった。

私がこの辺で一番印象に残っているのは、八月二二日（旧暦）のお祭りです。お祭は、神明様（大堀）と人見神社が一緒でした。山の上から見ると、神明様から川を渡って、山の上まで人見神社にお参りする人が蟻んこのようにつながって大変な賑わいでした。

神明様の神社の脇にかなり広い場所があり、お相撲が巡業にきたり、見世物小屋がたちました。神明様の入り口付近に大きな砂山（川がせき止められたとき、川が大堀に流れたために洲が出来た）がありました。神明様の境内が砂状なのはこれが原因でした。お祭になると、てっぺんまで上がり転んで遊んだものです。

#### ❖青蓮寺境内の思い出（人見）

明治二二年以来、神輿堂がここにある。お寺の境内に神輿堂はおかしいとか、お神輿がなぜお寺の境内から出ることの声をよく聞く。何故、お神輿

が神社でなくお寺にあるのか。

江戸時代まで、神と仏と一緒に奉って（ママ）いた（神仏習合）が、明治維新になり「神仏を一緒に祀る（ママ）ことあいならぬ」とのお達しが出され、神仏は分離されることになった。青蓮寺が人見神社の別当として面倒を見ていた時代の名残りである。

#### ❖青蓮寺境内の思い出（人見）

子供の頃、お寺の境内は、東西に直線で一〇〇m取れたので、陸上競技の練習をした。本来なら学校へ行って練習するのであるが、ここで遅くまでやって済ましたものだった。

戦前は、小学校でも子供たちの相撲大会がよく行われた。ここ青蓮寺の境内でも若い人たちによる相撲大会がよく行われ、村々の選手が参加し、応援する人や見物する人で賑わった。

また、終戦後（昭和二二〜二六年）の娯楽が少ない頃、檀家がみんな集まり、庭の正面にあった二本のモミの木の間で舞台を作って演芸会や仮装行列

をしたり、歌や踊りで楽しんだ。

♪一番とせく 一人人見山 うくん  
きたしよ♪



婚活だった素人演芸会

素人演芸会は、男女交流の場（現在の婚活）で、私の家内もこの時に知り合った。（旭屋）

#### ❖六地藏のつばやき

私は約三百年の昔から坂田橋近くの



浜辺に立ち続けて来た。彼岸の日、昔は春になると菜の花の間をぬって、遠く飯野、貞元から砂ぼこりを上げて、牛車、荷車、さては乳母車の列が六地藏の前の砂原へ集まってきた。あさりや蛤を掘りにくる農家の人達が、ありの行列のように続いたものである。

また、六地藏のすぐ隣の「安さん」の店にはいつもお客がいっぱいだった。店の前には、少し黄色い水がコンコンと音をたてて湧き出て、浜から帰って来た人達の足洗い場としてもにぎわっていた。

時々一時間毎に通る富津線バスは、唯一の近代交通機関で人気ものだった。一度木造だった坂田橋から落ちて大ニユースとなったことがある。そう言えば戦時中、敵の飛行機と間違えて太田山の高射砲が友軍機を落として無事砂浜へ着陸したことがあった。戦後も自衛隊のジェット機が私（地藏）の所から八百米位沖の汐引いた浜に落ちてあの大きなジェット機が砂の中へ見え

なくなってしまった（とうとう地中深く入ったらしく何も出て来なかった）。

初夏から秋へかけては「蛤採取」の漁師達が、海から帰るといつも五、十人、とぐろをまいてウイスキーにサイダーを混ぜて酔っ払っていたものだ。

六地藏の前が一番さわがしくなるのは、秋の彼岸の頃からだった。それは海苔の種付けが始まるからだ。その頃から私の前を行き交う人達は、みんな顔つきが変わって戦争をしているようだった。今なら一日三十、五十万円の海の稼ぎがあったから当然だった。

その海も昭和四十一年頃から埋められてしまった。そして私を訪れる人もなくなってしまう。時たま訪れてくれるのは、盂蘭盆になると近くのおぼあちゃん達がお念仏をあげてくれるだけになった。

さわがしくなったと思っていいたら、旧国道十六号から坂田中野線が四車線になることだった。そのうちに隣の菊込さんと自治会長が私の所に来て、あ

ぶないから公園の方へ移ってくれと心配し、その様に手配してくれた。お陰さまで今度の方が環境も良くなったし、いづつつけられるかの心配もなくなった。昔の人達も気がついてお線香を上げてくれたり、果物やアンコロ餅も食べさせてくれたりする。お札に私のご利益で坂田の皆様に、後生を守ってあげたいと思っている。（堤 史）

#### ❖ 昔日（セキジツ）の坂田

かつての坂田は国道一六号線に沿って遠浅な海岸に接し、海苔や貝類の養殖場としてその名も全国に知られ、簀立てや、手ぐり、地曳網、もあって、時には鱈（アジ）や、鯖（サバ）、鰯（イワシ）、などが肥料用に砂浜にばら乾しされたこともあった。

春から夏にかけての汐干狩りは近郊近在から牛馬車や荷車を連ねレンゲの花咲く農道を引きも切らせぬ行列は坂田の風物詩であった。又遠くは京浜地方からの客も多く海水浴を兼ねての汐干狩りである広い干潟が人々で埋まっ

てしまったものだ。漁協直営の海の家は大混雑、組合員交代での勤務、又隣組毎に、休憩所や土産物店など色々な売店を出店した。焼蛤(ヤキハマグリ)、蛤井(ハマグリドン)、あさり飯にあさり汁は坂田の名物だった。客が帰り波打ち際に打ち上げられた粗朶木(ソダギ)や板切れを集め採ったばかりの蛤やかきを焼きながら、砂浜に車座になって陽の沈むも気づかず酒を酌み交わしたことが懐かしい。

夏が去り、やがて木犀(モクセイ)の香りにのって秋祭りの太鼓の音が聞こえる頃、浜は海苔簀の建て込みが始まる。そして木枯らしが身にしみ、落ち葉で焼く芋の甘さが増す頃、いよいよ海苔摘みが始まり、人々は夜の明けやらぬ二時三時頃から海苔をすき、朝日の昇る頃には我家の軒先から家敷続きの田圃や、畑一杯によし簀に張られた海苔が乾されたものだ。海苔は暮れから正月にかけてが最盛期で、汐風も暖み菜の花も咲く頃になると、海苔も

終わり汐風を防ぎ東西に走る坂田の山々にも、ふきやワラビ採りでにぎわい、つつじや藤の花が咲き、蛙の声も忙しい田植えが終わると、緑深まり吹く風はゆりの香りを乗せて涼しく、秋はきのこ、栗、霜の頃の、ずみの実は甘酸っぱく、そしてメジロ採り、この山々を北側に南に広がる豊穡な農地に稲穂が実のり、黄金の波打つ様は、恵まれた自然豊かな里、坂田の象徴であった。

この自然豊かな坂田の里も昭和四十年頃を境に、かつてのドル箱坂田の浜に大工場が、豊かに肥えた農地には、ビルや商店、住宅が建ち憩いの場として親しまれた山々は団地や学園台と大きく変わっていった。(小野信次)

#### ✦まつりと子供

蝉も終わり、稲束の乾くにおいの風に乗って遠太鼓が夜空を伝わってくるようになると、秋祭りが近づいた事が知らされる。遠く近く、村々各地で祭囃子の練習がはじまるからだ。私

達の子供の頃は坂田のお店と言えば四五軒で普段あまりお金が貰えなかったから出入りすることが少なかった。お祭りになると神社の前と寺家坂馬場の下に僅かな玩具と駄菓子を売る店が出た。また坂田で暮らす大人たちにとっても八幡様のお祭りは一年の中で最大行事だった。また娯楽でもあった。

遠くへお嫁に行った人達も帰ってくるし、平素は口にならないような料理も作られて家族仲間でも、また神社へ集まれば馬だしや、お神輿かつぎで酔いっぶれる程飲んだ。そして祭りのクライマックスは陽の落ちた頃に提灯で飾られたお神輿が五十段の階段を神社に納められる光の祭典であった。

学校まで二十分の道のりであったがメダカ・ドジョウ・鮒・イモリまでいた。学校帰りはいつもこの川で泥んこになった。冬には田圃から落ち切れないうちは氷となって張っていたから滑るには好都合だった。ちよつと山に入ればクモを捕りけんかせた。キリギリ

ス・馬追い・バツタ・蜻蛉など捕獲の対象は沢山あった。今の坂田の子供達には小川もなければ海もない。車で行く海水浴、電車で行くデイズニールンド、遠くまで行かなければ求め難い事情になっている。都市化と共に故郷の風物が変わっていく。(秋元 晋)

#### ◆海苔漁(ノリリョウ)

当時、海苔場ができ、海苔の養殖がはじまったが、大和田は当業者がまだなく他の組合員に柵売していた。

明治三十五年、茂田と隣の大橋屋が共同し、はじめて海苔養殖を試みた。その頃、他の物価も安かったが海苔も厘以下と安く売った収入にはならなかった。ただ、海苔漁は冬の農閑期のころで、他に仕事もない。あるとすれば山仕事くらい、遊ぶよりましということが続けていたら、追々仲間ができて業者が増えてきた。当時は組合の事業で個人に権利が無く希望者は申込んで一柵何程かの料金を払って養殖した。浜は山から雑木を切って立てゝいた

が、青木、西川辺の者が樫篭を建てると海苔も厚く品質もよいので、それから松山を樫山にするようになり、樫の木がある家は樫篭を作り山師から買ふなどして樫の全勢時代となった。その他、檜篭を使用した。大正年代、組合員各自が権利を分担することになり自ら漁業をやめるひとは、他の人に権利を売却した。その後、竹篭を使用して見るものが出てきた。種付は不動で年により良否もあるが、費用が安くあがることで一時大いにもてはやされた。追々他の物価上昇につれて海苔の相場もあがり、海苔は主食物でなく附食物くらいに言はれていたのが、化学の進歩で海苔には非常に多くの「ビタミン」が含有することがわかった。品質が評価されたことで鶏卵一個が海苔一枚に匹敵し、次第に相場も高くなり現在に至ったのである。(茂田正治)

#### ◆漁

小学校を卒業したら、すぐ漁師で働いた。当時の舟は手漕ぎであった。何

年かしたら動力船になった。沖に出て行くのは夏、午前四時。冬は午前五時ごろからで漁場は三浦半島と大山の山が合致するところとめぼしをつけていた。一時間ほど網を流してあげるとシヤコ・エビ・カニなどいっぱいとれた。夏のシヤコやカニは食わず捨てたものだった。天候は雲行きで判断したが大体間違わなかった。(白井平八)

#### ◆子供の頃の思い出

昔の人が如何にものを大事にしたか思ったこと。先ず下駄の歯入れ屋が車を引いてきて日当たりの良い場所で商賣を始めるとそちこちからさゝはぐれた下駄を持参して新しい歯を入れ替えて貰う。又、洋傘直しが来て骨の曲がりや折れた傘を修理した。今なら皆スクラップにして仕舞うものだった。又、ポーと気笛を鳴らして羅宇屋(ラウヤ・キセルの羅宇内部にたまったヤニ掃除や羅宇を交換する職業)の車が来るとキザミ煙草の多い頃だったので煙管の火皿と吸口の間の竹管を大人が集

まってきたてすげ替えて貰うのを覗いて見ていた事がある。鍋釜の修理に鑄掛屋（イカケヤ）も来た。



鑄掛屋

ゴム靴が出来てからパンク張りも来たが、その頃はそうした仕事で良く商売が成り立ったと今考えると感心することばかりだ。行商人も多かった。着物や股引き等あてつぎのあるのを着せられていた。そして裸足で遊び廻る方が多かった。今は社会制度が良くなって子供から年寄りまで綺麗な服装で衣食住に何不自由なく幸せに暮らせる様になって全く有難い世になった。子供相手の行商も多くヨカヨカ飴屋が飯台を頭に乗せて太鼓たゝいて賣り歩いたり、

飴細工屋とか糝粉細工屋（シンコザイクヤ）は鶏や兎等見事に作って呉れた。その技術は大したものだったと思う。

（坂井英雄）

#### ✦私の思い出

私の生家は今と同じ人見ですが、同じ人見でも人見山を廻った所です。弟妹が大勢で長女の私は物心ついた時は毎日／＼子守で背中の中空いている時はありませんでした。小学校二年生の時です、あの関東大震災でした。夏休みが終り二学期に入り午前中で家に帰り昼休みの出来事でした。その日の朝、家の人達が「今朝のお天とう様は真赤だナア、何か変わったことでもおこるのでは」と話している事が記憶にあります。何日も家に入れず外に寝ました。学校もつぶれて仕舞い坂田のお寺や人見の青蓮寺での勉強でした。

その頃の父は左官職人で毎日家にはおらず、母が身体が弱く私が六年生になった頃からは学校も休み勝ちでした。長女の私になり百姓の仕事や子守

り、弟妹のご飯の支度迄、又冬には海苔仕事と体の休む間もなく働きました。でも其頃の子供達はそんな事は当たり前様なものでしたのでつらいとは思いませんでした。結婚してからの人生がすっかり変わり男たちは戦争に家には姑と子供の家族です。それからの苦労は文字に書いても書いても書き切れません。本当に苦労の連続でした。食糧は配給で衣類は自分の着物を夜なべ仕事でほどこいては子供のモンペを作ったり、足袋を作ったり、ランドセル追手作りでした。子供が学校に行くにも弁当のオカズがなく毎日／＼がつらい思いでした。こうして苦労に苦労を積みいつの間にか七十の坂道を上って来て仕舞いました。今になっては孫や子供達と苦労話が出来るので今まで元気に生きて来たからと感謝の気持ちで一杯です。これからの日々ゲートボールしたり、旅行に行ったり、一日一日を楽しく送り度いと想います。

（白井まさ）

### 第三節 昔ばなし

\*人見村獅子頭山（シシカシラヤマ）

東京湾を江戸時代は何と呼んでいた  
のであろうか。江戸湾と呼んだとすれ  
ば、それは黒船渡来以後のことである。  
江戸湾という名称は外国人が付けたも  
のと考えていい。しかし江戸町人にと  
って、江戸の海はまことに親しみ深い  
海であった。 <



常盤津「お園六三、洲崎堤の段」の  
語り出しの文句に、「春更けて江戸の淡  
路の上総山、洲崎に通ふ浜千鳥、幾夜  
寝覚めの関もなく」というのがある。  
江戸から海をへだてて上総の山々を見  
ると、あたかも、千鳥の名所須磨、明  
石から淡路島を見るようであった。  
徳川三代将軍家光が品川の御殿山か  
ら安房上総の山々を遠眼鏡でご覧にな  
ったという伝説がある。御殿山は太田  
道灌の出城のあったところで、江戸時  
代には将軍家の品川御殿があり、桜の  
名所で、「江戸名所図絵」の錦絵にもな  
っている。遙か彼方には、鹿野山や鋸  
山が墨絵のように霞んでいる。将軍は、  
「あの獅子頭のような形をした山は何  
山か」と侍臣におたずねになった。遠  
眼鏡をお借りして眺めてみると、なる  
ほど獅子舞の獅子頭にそっくりの山が  
海へ突き出していた。しかし山の名は  
わからない。将軍のご下問にお答えで  
きぬとあつてはえらいことである。直  
ちに上総に向けて早馬に乗った使者が

出発した。江戸と上総の距離は二五里  
（百キロ）である。宿場、宿場で馬を  
乗りついで、まる一昼夜がかりで使者  
が帰って来た「あの獅子頭の形をした  
山は周准郡人見村の妙見山でござりま  
す」。それ以来、人見の妙見山とも獅子  
頭山とも呼ぶようになった。その人見  
山の西側に君津製鉄所があることは皆  
さん既にご存知である。

\*木こり脳天の万人

むかし、人見村に万人という大男が  
いた。両親とは既に死別していたが、  
生前、両親は万人の顔がみにくいこと  
を憎んでいた。物心つくようになって  
から、万人は若い女の子と眼を合わせ  
ることを恐れた。若い女たちは万人を  
見ると、その顔のみにくさに眼をそむ  
けた。

ある時、その万人が妙見山の山つづ  
きの森で薪を切っていた。薪は人見村  
の大切な産物の一つで、切り出した薪  
は小糸川河口から五大力船に積まれて  
江戸へ出荷されていたのである。森の

空は静かで青かった。お天道さまが森の真上に来たので、万人はおべんとうにしようと思った。枯枝を集め火打石で火をつくり焚火を始めた。そして沢



から水を汲んで来て、砥石でなたを研ぎだした。これを研いでしまったらおべんとうにするつもりだったのである。ゴシゴシ、ゴシゴシ、なたを研いでいると森かげから若い美しい娘さんが、こちらへ近づいて来た。万人がこの地上で最も苦手とする若い女性である。

娘は縞のきものに赤い朱子の帯、桃割れに結って前髪には花飾をさしていた。明らかに人見村の娘ではなかった。第一、人見の娘なら万人に近づくとはずがない。しかも、ほとんど人の通らぬ森の道に、こんな美しい娘が只一人来るとは合点がいかぬ。娘は近づいて来て焚火に美しい手をかざした。その指は白くて細くて美しかった。娘は焚火に手をかざしながら、なたを研ぐ万人を眺めていた。万人はいきなり、なたでその娘の脳天をぶちたいた。娘はキャンキャンと鳴いてきつねの正体をあらわして大和田の山中深く逃げ去った。あとで村の人が「もし本当の娘さんだったらどうする気だった」と聞くと万人は「本ものの娘だったらおれに近づくとはずがない」とさびしく笑った。

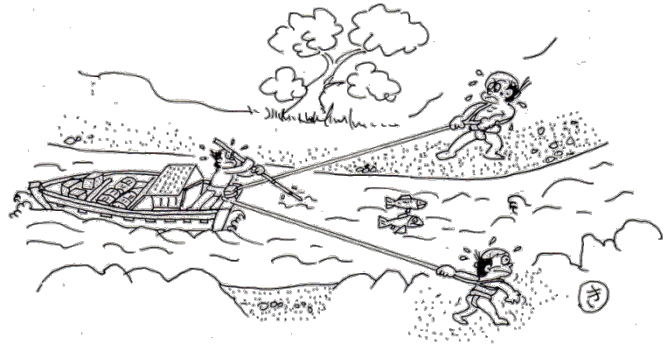
#### \* 日本版ボルガの舟歌

小糸川上流の山岳地帯の産物のうち、木材と竹は筏を組んで小糸川河口まで運ばれたが、米・木炭・薪は、川船で下流へ移送された。河川を利用して、

舟で物資を輸送する方法は、豪商角倉了以が関西で開発した新技術であるが、小糸川の舟運は、了以の開発に遅れること八年、慶長一八年に始まる。江戸から明治・大正と続き大正一二年九月の大震災で、小糸川の土堤が各所で崩れて川船航行が不可能になるまで、三〇年間続いた。

川船は、薪なら一三五〇束、米なら八〇俵積めた。上流の粟倉堰を板で堰き止め、船を出す時は、その堰板をはずして、一度にドツと水を流す。その水に乗って一日のうちに小糸川の河口へ到着した。河口には、大堀河岸と大和田河岸があつて、そこで荷揚げして五大力船という海船に積みこまれた。大和田河岸は、現在君津製鉄所の構内の一部となっている。

曳船は三人がかりである。一人は竿を持って船に乗る。竿頭はY字形になつていて、その竿を川砂にさしこんで、舵をとる。あとの二人は、河岸の細道を曳綱を曳きながら上つて行く。船は



後尾を川上に向け、後尾ほどよきところ  
に柱が立っている。その柱から二本  
の綱が出て、先端は輪になっている。  
曳子はその輪を肩にかけ身をかがめて  
地を這うようにして船を曳いていく。  
綱を曳く道は、綱道と呼ばれ、左岸  
にあつて、川の流れに沿って上流まで  
蜿々（エンエン）と続いている。昔の

人は川土堤の藪を上つていく曳き舟の  
掛け声をよく聞いたものである。「キャ  
アー、コラコラコラ」と一人が叫ぶと  
少し間を置いてもう一人が「キャアー、  
コラコラコラ」と叫ぶ。なんとも云え  
ぬ悲しい叫び声であつたという。小糸  
川の川船については、最近刊行された  
「小糸町史」に詳しい文献が出ている。

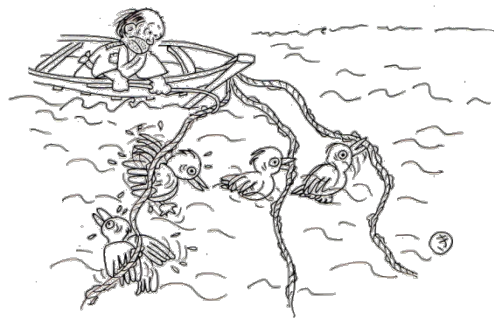
**\*人見村の水鳥献上**

鴨は、夏はシベリアやカムチャツカ  
などにすみ、秋の終わりになると日本  
へ渡つて来る渡り鳥である。一口に鴨  
といつても、マガモ・ハジロ・アカベ  
ラ・クロベラなどいろんな種類があり、  
内陸にすむものと海にすむものと大別  
されるが、小糸川の河口にはあらゆる  
種類の鴨が集まつて来たようである。

うしろに人見山丘陵があつて、小糸  
川河口の海は波がどこよりもおだやか  
だつた。鴨は案外すばしこくて、一つ  
玉の火縄銃でうつことは余程の名人で  
ないとむずかしい。

江戸時代の人見村では鴨取り繩とい

う独特の捕獲法が発達していたが、も  
ちろん、今ではすたれてしまった。繩  
は萱の穂を若いうちに摘んでない上げ  
たもので、これに油もちを塗る。この  
鴨取り繩を積んで舟で海へこぎだし、  
次々と海面へ投げこんで行く。もち繩  
が鴨の泳ぎを妨げるので、それをきら



つてのこぎりの歯によく似たくちばし  
でくわえてヒョイと背中の方へ押し上  
げる。その拍子に繩の鳥もちが翼にね  
ばりつく。鴨は水しぶきをあげてバタ  
バタするので余計鳥もちが翼にからみ

つく。それを別の船が出てつかまえるのである。こうしてつかまえた鴨は江戸の鳥獣問屋へ出荷された。

昔は、年の暮れになると幕府の勘定奉行を通じて、人見村から將軍家へ水鳥献上が行われた。つかまえた鴨のうち、最も優秀なものだけを選び、これを竹籠に入れて、村役人付き添いで、土地の若者がかついで、夜通して江戸へ送られた。普通の荷物なら宿場毎にリレーして送られるのであるが、水鳥献上の籠だけは人見村の若者が江戸までかついで行ったものである。江戸まで約百キロ、前の晩に人見を出発してあくる日の夕方には幕府の勘定奉行役宅まで到着したという。アベベのような駿足の若者がこのあたりには大勢いたものらしい。

＊内裏塚（ダイリツカ）の長齋

むかし、人見村の妙見さまの南側の小糸川には大きな岩が川の中へ突き出していた。秋の出水のたびに、その岩は少しづつ上へ流れていくように見えた。

ある夏の日、飯野村内裏塚の長齋という底抜けのお人好しがこの岩の上に来て、洗濯するつもりで、きものを脱いで、川へ浸した。長齋はそのまま、ごろりと岩の上に寝て、いびきをかき



始めた。夕方、眼をさまして見ると、きものは流されてしまつて、かげもかたちもない。びっくりして、エッサッサのモッサッサと、川上へ向かつて駆け出した。妙見さまから一里半上の釜神へ来て、きものが逆に流れて来るのを待っていたが、待てど、暮らせど、

きものは流れて来ない。岩でさえ、上に流れるのだから、きつと上へ流されたものと長齋は考えたのである。

その長齋と、人見村神門の「とん」という男が、妙見さまの下の小糸川の板橋で、ばったりと出会った。長齋も底抜けのお人好しだがとんも長齋に輪をかけたような男である。とんは、人に金を貸し、期限が来た時、とんの方から利息を払ったことがある。とんは長齋の顔を見ると、「この頃はえらく米が高くなって困らア。おらの方では一升一〇〇文になった」と云った。誰かが云ったことの聞きかじりである。長齋は、「そうか、それは気の毒な。おらの方では、まだ、五合五〇文だ」と答えた。とんは、ううむとうなつて、「そうか、それはうらやましいことだ。飯野は、さぞ暮らしよいことであろう」長齋は、得意になって、そっくりかえつて、足もとを見ずに歩いたので、板橋を踏みはずして、ザブンと小糸川の中へ落ち込んだ。



＊旅画師（タビエシ）北齋

長須賀村（現木更津市）の名主清左衛門は風流好みで、諸国をめぐる旅画師や俳諧師を一〇日でも二〇日でも喜んで滞在させた。

ある年のこと、百琳宗理と名乗る旅画師が、清左衛門の家にわらじをぬいだ。この男は、ろくろく挨拶の仕方も知らぬ男で、名主の家に厄介のかけ放題であった。村の紺屋の与助も、絵筆の名人で、このあたりで絵をかかせたら、与助の右に出るものはあるまいという評判であった。村人が面白がって、与助と旅画師と腕くらべをさせてみることになった。

ちょうど、日枝神社の祭礼が近づいたので、鳥居先に立てる大のぼりの絵を、一本ずつかかせることになった。紺屋の与助は、「乞食同然の旅画師め、何程のことがあるうか」と天狗の鼻を高くして、腕くらべを引き受けた。当日になると、日枝神社の境内に板を敷きならべ、その上に白地の大のぼりが

並べられた。まずはじめに与助が丹精こめて、昇り竜をかいた。つぎに旅画師の宗理が、大筆に墨をたつぷりふくませて、奇妙な筆づかいでおかしげなものをかきはじめた。

でき上がった絵をつくづく見ると、のぼり一杯に逆巻く波をかき、その波の穂の間に逆富士の見える景色である。見ていた村人は、この勝負は引き分けだと思ったが、紺屋の与助は、さすが自分で絵をかきくほどだから、上手下手の見分けがつく。人の見ている



前もかまわず、旅画師の前にひざまづき、「お、恐れいました。お名前をお明し下さい」と三拝した。与助が勝てぬのも道理で、その変わり者の旅画師こそ富士を描いては日本一とうたわれた葛飾北齋だったのである。

＊孫になった狸

むかしむかし、神門に久左衛門という家がありました。久左衛門には孫をかわいがったばあさんがいました。ある年、家の都合で孫を小久保の六人曳の網元の家へ働きにやりました。ところがどうしたことが夜になると、必ずといっていいほど帰ってきて、「ばあさん、帰ってきたよ。おらあ六人曳は骨がおれてしょうがねえから、行がねえにしようかな」といって、ばあさんを困らせ、駄々をこねたあげく、ばあさんが心をこめてつくったアラレを食ったり、持ったりして小久保の網元の家へ行きました。

ある日のことです。めずらしく、孫が昼間ひよっこり帰って来ました。ば

あさんは、おとなのようにりっぱな体になった孫を見て、目をほそくしてよろこびました。あれ食え、これ食えと、いろいろな御馳走をつくって食べさせたばあさんは、毎晩のように帰って来た孫のことを思い出して、「なあ、お前さんも、そんなに家へばっかし帰っていちや、網元のとつつあんもよく思うめえ、もうちつとしんぼうしろよ」といったところ、それまでのんびりして御馳走を食っていた孫が、急に変な顔をして、「ばあさん、あんだかよ。おらあ小久保へ行つてから、帰ってきたのはこれで二度目だよ。あに考えているんかよ」といったところ、ばあさんもおどろいて、「おかしなこともあるもんだな。だつてお前さんは、毎晩のように帰ってきたじゃねえかよ」といつて不思議に思いながらも、はなしこんでいるうちに、日が暮れてしまいました。久しぶりで孫もとまることになって、ばあさんが仕度をしていたところ、またいつもの声がして、「ばあさん、帰っ



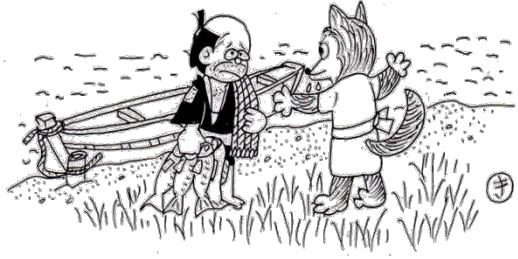
てきたよ。おらあ六人曳は骨がおれつから行がねえよ」と暗やみからいきました。「おかしなこともあるもんだ。孫は来ていてとまるといつてんのに」とひとりごとをいいながら、孫の方を見たところ、孫はちゃんと家の人たちとはなしこんでいました。「こらあたまげた、孫が二人になつちやつたわ。そういえば昼間帰ってきたのは、これで二度目といつてたが、やつぱり夜来ていたのは、お山の狸だったか」とはじめ気がつき、そばにあった天秤棒を持

ち出して、「こんちくしょう、孫は昼間帰って来ていらあ、さんざん人をだましやがって」と近寄ったところ、それまで孫になりきっていた姿は、思ったとおり狸になり、あわてて逃げ出したということでした。

#### \*坂田七ツ堰の怪

君津町坂田の山中に「七ツ堰」という大きな池がある。七ツ堰といっても、大堰、新堰の二つがあるだけで、後の五つは何処にあるのかわからない。

大堰の水は赤土色で棲んでいる鯉も赤土色をしている。新堰の水は澄んでいてそこには青みどろがはびこっている。むかし、この堰の奥の稻荷森には、お春といういたずら狐がいてここを通る人を化かしたものである。ある時漁師が手繰り網から夜明け方に上がって、通りかかると、お春が出て来て「魚をくれ」と云った。「とんでもねえことだ。おらは家へ帰ってこれで一杯やるんだ」と云った。お春は怒ってこの漁師にのりうつた。漁師はあらぬことを



口走り、鎮守の森の石段を横つ飛びに駆け上がった。小糸の上から祈禱師が来て、鉄砲を向けて「ぶつがいかに」と云った。つぎは「ちよつと待ってくれ」と云ってから「サア、ぶつがいい」と云った。祈禱師の方が恐ろしくなって御幣を担いで退散した。この狐つきは自然に治ったという。そんなわけで、堰の周りは狐、タヌキの古巣になっていた。堰をめぐる、山根に沿って、老松が何本も幹を並べて天にそそり立ち、その幹にからんだ藤が、

春の終わりには、一斉に長い花房を垂れて、それが池に映って、なんとも見事であった。

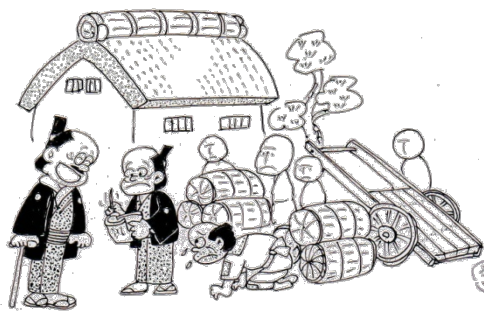
七ツ堰というのになぜ二ツしか堰がないのか、故人の土地の古老秋元猪太郎さんが見事その謎を説明してくれた。「あそこは七ツ（午後四時）を過ぎると、うわばみ（大蛇）が出るということで、日暮れには誰も行く人がいなかった。堰の名はそこから出たもので、もともと、堰の数が七ツあったわけではありません」。日露戦争の勇士で当時八十七歳だった猪太郎さんは、こんなふうに堰の由来を説明してくれた。

＊太閤検地のはなし

天下を統一した豊臣秀吉、徳川家康の事業はいろんな著書によつて広く知られているが、当地方でみつかつた古文書によつて秀吉の一大事業といわれている太閤検地のことを取り上げたい。天正一八年、関東の北条、奥州の伊達を下した秀吉は、巨大な築城や軍費の収入をはかる必要に迫られ、検地奉

行浅野長政に命じ、まず奥州の検地を命じた。それは極めて厳しいもので反対する領主があればなで斬りせよ。農民においても一郷も二郷もなで斬りにしても構わない、念入りにやれというものであつたと伝えられている。

坂田の名主の大牧新左衛門が写し残した「坂田村惣百姓田畑名寄帳」によると天正一九年、関東御繩奉行大久保



十兵衛らが当村を検地し、当村田畑二六〇余石あつたところ、ほかに原野や茅原、谷合の田畑が約一〇〇石あつた

ことからそれを見積り、村高は三六三石四斗六合に決められたとある。つまり約一〇〇石が検地の結果、年貢対象となったわけで三八%強の増税である。この後、慶長、宝永の両度(ママ)に地頭による御地改めが行われているが、石高にはさしたる変更はなかったようだ。見方を変えれば開発などはなかったといえよう。文化一〇年の記録では、田三〇町三反一畝一二歩、畑二四町一反九畝一九歩で、石高は同じである。

＊江戸南町奉行所のお裁き

文政二年卯年といえ、今から一六〇年ほど前のことである。將軍家斉の治世下で、おりからイギリス人などしきりに来航して通商を求め、封建鎖国の島国日本をゆるがす時代の波がひたひたと押しよせてきた頃だ。

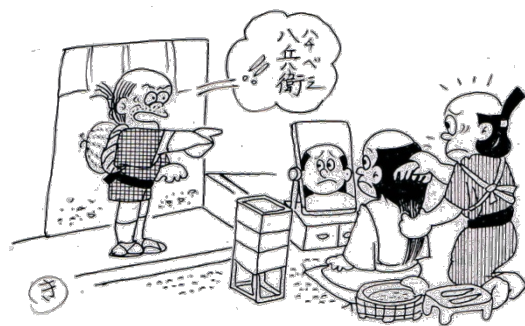
上総の国坂田村に某という農家の主人がいた。この男は村では比較的上位の自作農であり、惣領が病死して跡取りがなかったために、縁を求めて二里ばかり奥地の村の名の通った山持ち大

尽から婿を迎えた。仮にこの婿殿の名前を八兵衛としておこう。しかし、この八兵衛は不心得者で間もなく家出をしてしまった。身許調べがずさんだったことを悔やんでもあとの祭りでは仕方がない。ところがどうした風の吹きまわしか、この婿殿は七年目に帰縁した。家族一同が複雑な気持ちでこの婿を迎えたことは想像に難くない。八兵衛はしばらく働いていたが持った病いか、またしても翌年、今度は着類全部を持ち出して家出をしてしまった。主人はひどく立腹して婿の実家に掛け合ったが、行先知れずではどうにもならず婿が江戸にいるらしいとの噂さで、その筋に江戸居住を願い出て江戸に出かけ、この婿を探し歩いた。

幸い春頃、麻布でこの八兵衛が髪結床にいるのを見届けたので身柄を某に預けた上で、早速南町奉行所にこのことを出訴に及んだ。

当時、幕府の統治政策は農民を徴税や労役源として確保するために、土地

を放棄してみだりに他領に逃散するこ



とを許さず、刑罰をもってこれを強制していたがどのような種類の刑罰が定められていたかはつまびらかでない。同奉行所では与力筒井某の係りで調べが進められたが、八兵衛は駆落ちはいたさないと申し立て、双方が譲らず八兵衛は仮牢に入れられてしまった。

一方婿を匿った髪結床の某は現在でいうところの犯人蔵匿罪(ハンニンゾウトクザイ)を適用されて過料三貫文

を仰せつけられた。そして八兵衛は地頭に引き渡されてその空部屋に手鎖で留置され、日々吟味が続き、ついに久保村某、中野村某が立ち会いのうえ聞済金（和解金）二〇両で話し合いが成立した。しかし、春ごろ出訴して盆前に解決すると思っていたのに解決が永びき盆後に及んでもなをお呼び出しがあり、種々の費用が嵩んで二〇両の和解金も受け取ったが他に二五両ほどたさねばならぬ仕儀になってしまったと嘆いている。八兵衛は地頭から親不孝の故をもって村払いを仰せつけられた。

これは古文書にもとづく実話だが、訴訟というものは洋の東西を問わず、今も昔も同じく年月を要し、金も多にかかる割に合わないものであるとしみじみ感ずる次第だ。同時に今の世の勝手気儘にものを言い、行動のできることが空恐ろしいまでに有難い。

\*酒がなければいられない人

大堀に清吾と言ふ老人がいた。人見橋下の小糸川で毎日小船でうなぎを釣

っていた。焼酎が呑みたくなくなるとな

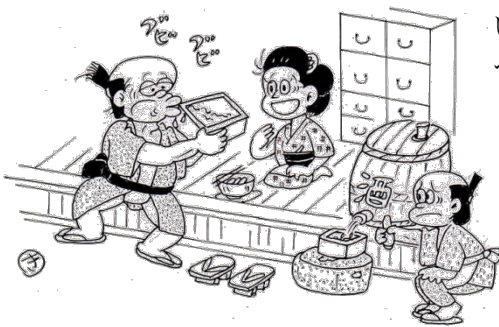


ぎを売りに行き呑みに来た。一日何回もうなぎを売っては呑みに来る。焼酎一ぱい一〇円であるが、この酒のみ老人は、うなぎが一〇円一ぱいにならない内へのみたくてたまらないので、うなぎを売りに行く。今度、八錢だけ焼酎をのませてくれと言ふ。雨が降って川の水が幾分濁ればうなぎはよく釣れるので、其時は焼酎の呑み過ぎで船の中に寝てしまい、船は流れて川尻方面で他の船に引船されて来る事が度々あ

った。人見橋周辺より遠くには行かない。酒を呑むのに近い方がよい。

\*荷物船の船頭は酒が強い

昔、五大力船といひ薪炭積の荷船が小糸川には何隻もいた。其の中で、仁花の岩さんと言ふ船頭が、一番酒が強かったといふ。



ある日、この岩さんが酒を買いに来た。入物も持っていない。入物はいらぬ、呑んで行くだからと言ふ。一升枡でよいと言っているので一升枡で出したら、枡のすみからくびくびと二口位で呑ほしたので驚いた。只、呑まし

てくれれば、後一升呑んで行くと  
言ふていた後で、仲間に聞いた  
ら三升位かなという大酒家。

※私は狐には化かされない

私が二四、五才の青年の頃、  
投網がすきで、夏は毎日ひまさえ  
あれば投網ぶちに行つた。ある夏  
の夕方、子守の「おたつ」を  
連れて川尻の新川べりに投網  
をしたら、すなめり如き大物  
が沢山に泳いでいる。いくら  
投網をうつてもとどかないの  
で「おたつ、これは駄目だ。も  
りを持って来るから帰ろう」と。  
おたつを家に置き、もりを持  
つて

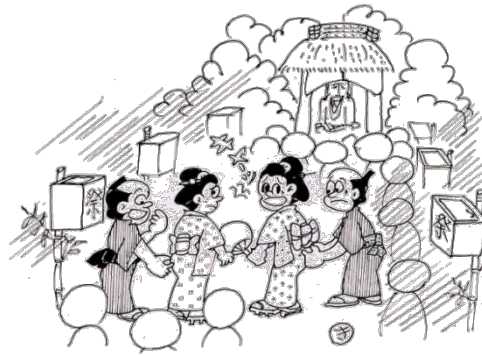


出かけたら、前の大草の店で  
佐野やのばあさん、おき縁で涼  
んでおつた。このばあさんが  
尋ねるので、川尻にすなめり  
が沢山いる。投網では取れな  
い「もり」で取るだと言え  
ば、お前は狐に化かされてい  
る、行かない方がよいと注  
意してくれた。私もそんな事  
があるものと、もりを片手に  
川尻の場所につくと、汐は干  
汐になり水が無く、魚の影  
すら見られず、失むえず引返  
し其日は、魚一匹も取らず  
狐に化されたことになつて  
しまった。

※けつね祭り

昔、飯野村笹塚に観音様といふ  
のがある。このお祭りが七月  
一六日と一七日で、一七日  
は夜祭として近村の老若男女  
をとわず沢山の人が観音様  
のお祭りに行つたものです。  
観音様の参道両側には、地  
口あんどんのあかりをつけて  
賑やかなお祭であつた。そ  
の人込みの中で、だれのおけ  
つをねじつても、其晩は文句  
なしの行事である。特に若い  
男女に多かつた。

昔、若い娘さんは男女関係が  
きびしく夜の遊びには出  
してくれないが、この晩ばかり  
は友達をさそいあつて観音  
様に出かけられる。是を幸  
いと若い男衆がつけねらつて、  
けつねじりをする面白い  
行事であつた。これも明治  
時代



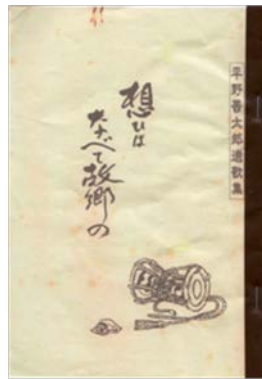
の風物誌で、其後はいつしか  
自然になくなつてしまつた。

※出典『津風土記(人見君太郎著)』  
人見老人学級「川名邦五郎著」。「房  
総の民話」高橋よし著。郷土史資料  
から見た坂田村の昔話「坂井清治」。  
※挿絵・木曾野正勝



## 坂田の歌人 平野晋太郎

・墓塔 寺家坂共同墓地



平野晋太郎は、大正九年六月二一日、周西村坂田に生まれた。

少年のころから短歌に親しみ十七、八歳の青春時代は「アララギ」派の歌人としてその将来を期待されていた。

しかし、昭和十五年十一月三十日召集により佐倉歩兵第五七連隊に入隊。その後は北支へ派遣され、濠北、ハルマヘラなどに駐屯し、昭和二十年一月三日、斬り込み隊に属し二十四歳の若さでモロタイ島にて、戦死した。

『昭和は愛（カナ）し「昭和万葉集」秀歌鑑賞』（講談社）より

「生くるより

むしろ死（シニ）をば思ひをり

散開（サンカイ）前進に

うつりしときは」

平野晋太郎

戦場が、常に生き死にの境を彷徨する場であることは「自明の理」である。

というより、誰もが故郷を出た時点で死を覚悟したと言ってもいいだろう。

しかし、いよいよ死を目前の事象とした時の感慨は、また兵士にとって格別な

ものがあつたに違いない。

そうしたひと時を過ごした兵士が、敵弾の中に飛び出し前進を始めた瞬間の心境である。そうした、いわば土壇場に身を投じて、だれもが口に出せないまでも「生きていたい」と切に願うだろうものを。

作者は「むしろ死をば思ひをり」と歌ったものである。そうした瞬間の心境を戦闘直後に回想し、作者自身不思議に思いつつ、この歌を作ったのであるかもしれない。しかし、それは生きることを願っていては到底一步も前進できぬ恐怖状況に身を置いていたことの証明であつたというべきであらう。

「むしろ死をば……」という絶叫を執拗に繰り返し自分に言いよかせること、それだけが敵陣に向かって身を投じさせる勇気を作者に得させたのであらうし、そうした心が団結を生んで、かろうじて敵を撃退させもしたのであらう。

思えば「傷ましい」と言うより、これ以上ない過酷な状況の中を生きぬかねばならなかつたということである。そうした体験を、作者はその後何度というより何十度あるいは何百度も経験していったに違いない。『平野晋太郎遺歌集刊行会』平野ゆき